

23年あまり暮らした横浜を離れ、生まれ故郷・九州に移って早二ヶ月になろうとしています。子供を育て、市民活動に明け暮れた横浜での充実した日々を思い起こしながら、活動の原点となった映画「柳川掘割物語」の舞台である柳川の様子をレポートしたいと思います。

生みの親、柳川

6月16日、横浜から来た娘たちを連れ、柳川の川くだりに行ってきました。柳川市は福岡



市から電車で約一時間(私の住む筑後市から車で25分)、詩人・北原白秋のふるさと(写真:白秋の歌碑)としても有名な、人口4万6千人の小さい町です。矢部川の河口部にあたり、筑後川にはさまれた沖積平野で、市域面積38平方キロの中に全長470Kmに及ぶクレーク(水路)が、網の目状に張り巡らされています。

ここを舞台にした長編記録映画「柳川掘割物語」は二年半を費やして1987年に完成しました。(アニメ

「風の谷のナウシカ」の監督、宮崎駿が制作担当)この映画は、ドブ化した掘割を埋め立てることが決定した後、柳川の掘割の歴史や機能を調べた担当係長が、柳川にとって欠かせない大切な役割を持っている事を知り、また、何よりも水の大切さ命の大切さに気付かせるために、「埋め立てに抗し、川の再生を図る」ことを決意しました。そして、市長や役人、住民を根気よく説得し、協力を仰ぎ、方向を180度転換し川下りができるほどに再生させた過程を記録したものです。

この映画は全国で話題になり、各地で自主上映が行われましたが、旧緑区でも、実行委員会を作り、緑公会堂で上映会を行いました。その後これに感動した人達が「私たちも身近な地域の川に関心を持ち、子供たちにふるさとの川としていい環境を残してあげたい」と、市民グループ「緑区・川を楽しむ会(あおばく・川を楽しむ会)」を設立しました。

掘割の機能(必要性)

筑後平野は筑後川が大量の土砂や火山灰を山から運び、有明海の潮汐作用でできた平野です。柳川の市街地は海面上昇が止まった今から約5千年前から弥生時代にかけて陸化した所で、当時の海岸線の微高地です。平坦な湿地を耕地や住居地にするため、深く掘って土地に嵩上げしました。そうして沢山の掘割水路ができました。また、有明海の干満差は湾奥部では最大7mにも達します。柳川の市街地の標高は3mですから、満潮時の降雨は全然海に出ないのです。だから水田や掘割は遊水地の機能も果たしているのです。もし、掘割がなかったら、井戸を掘って水をくみ上げる事になり、地盤沈下を起こしますので、掘割は直接地下水を涵養していることにもなっています。

また一方、柳川は柳川藩の城下町でした。平坦な土地に築かれたお城です。城を守るため

にも堀は重要な働きをしたのです。
生活を支えた掘割



この掘割水路の水は降雨のほかに矢部川からも引いてきました。農業用水として利用されるのは勿論ですが、人々の生活用水としても欠かせないものでした。地下水は塩分が多いため、飲用に適さず、掘割の水を使っていました。朝早く（5時ごろ）くみ上げた水は飲み水に使い、野菜を洗ったり洗濯したりまた顔を洗ったりと本当に大切な生活水でした。それに、物資の輸送も掘割に船を浮かべてやっていました。また、秋になり稲の灌

漑が終わると、堀干しをするのですが、その時を利用してフナやコイを捕るのです。捕ったフナは竹串に刺して炭火で焼き、巻き藁に串ごと突き刺してかまどの上に吊るして燻製にし、保存食にしていました。掘割から浚われた泥は田んぼに還元し、たっぷり含んだ栄養（肥料）で作物（稲、小麦、イグサ等）を育てました。

水の思想と文化

柳川では飲み水として再び自分たちの口に戻ってくること（水循環）が日常的に目に見える状態でしたから、当然、捨てる水（排水）にも充分気を使い、掬のようなものもありました。直接川に捨てないで、一度素堀りの溜に落して沈殿させ、さらに素堀りの溝を通して掘割や川に流していました。掘割や雨だれの落ちる所やミミズに、おしっこをかけるな、つばをはくなどか、一人でいつまでも泳いでいると河童にひかれるなどと言って、大人は子供たちを育てました。水浄化をしてくれるミミズに感謝し、命の水を大切にしよう戒めたので



しょう。
また、文化も掘割の上に築かれていきました。大きな掘割の堀干しは、集落総出で行い、足踏み水車を五段も六段もかけ、夜を徹して全員が交代で踏みました。水が引いたあとで行う魚捕りは、まるで戦場のようで、集落の年中行事の中で最も楽しいものでした。その他、川神様に感謝し、日照り除け、水難除けを祈った川祭りも、集落の老年・中年・青年・子供がそ

れぞれ男女別々のグループでやっていました。水の神、川の神を祀る行事は、水神祭、水天神祭などがありました。このような共同作業やお祭りは地域の連帯感を生み出しました。

(写真：四つ手網)

掘割の荒廃

上水道が普及すると、とたんに人々の川への関心が薄れていきました。掘割は水面が見えないくらいのごみ捨て場となり悪臭を放つようになりました。また、水路の上が不法な物置代わりにもなりました。やがて、祭りも廃れ、人々の水思想も失われてしまいました。川や水路が汚れてくると、「下水道の普及率は文化のパロメーター」とかいうようになり、下水道を作りました。そして、汚れた川は次々と蓋をしたり埋め立てていく方向に考え方が変わってきました。

捨てた水はまた戻ってくるという考えがなくなり、タレナガシになってしまったのです。こういう現象は全国で（横浜でも）おこりました。

掘割の埋め立て計画を再生計画へ

柳川の掘割の再生は行政マンの力に負うところ大です。柳川の川くだけは昭和 36 年ごろから、観光事業として始まりました。しかし、ごみ捨て場となった掘割は「公害列島」といわれた昭和 40 年代には荒廃の極みに達してしまいました。（このころに環境庁ができました）。何度も多額の予算を組んで浚渫するのですがすぐにだめになるのです。川をきれいにするという事が「観光のため」ということで、市民参加がなく、市民のものになっていなかったのです。そこで住民の中からの声で「環境衛生組合」がつくられ、住民による川の清掃、浚渫、消毒等が行われました。それでも成果が上がらないために、とうとう昭和 50 年には市に環境課が設置されました。そして、環境課が管理体制を一元化すべきと、水路に関する各課に呼びかけ、水路関係課長会議をもちました。いわゆる縦割りではない画期的なやりかたです。担当係長まで入れると 15、6 人のメンバーです。しかし、ここでの検討も奏をせず、53 年 3 月議会では、一部を残し大部分の水路を埋め立てること、及びそれに関する予算が議決されました。そして、4 月から始まる埋め立て事業の担当係長には他部局だった広松伝さんが命ぜられました。そこで広松さんははじめて柳川の掘割の歴史と機能を調べましたら、地盤沈下など大変な問題が起こる可能性がわかり、埋め立てに抗する決心をしました。小さい頃から掘割で遊び、沢山の経験をし、水循環の大切さを身をもって感じていたからです。

不可欠な市民参加

庁内の関係者や議員の説得は難航しました。ついに市長に直訴し、再考を求めました。幸い、猶予期間をもらう事ができ、川の機能、役割、再生案を文書化し、説得を続けました。そして、浄化再生を成し遂げるための絶対不可欠なものとして「住民の理解と協力・参加」であることを確信しました。掘割が作られた歴史的背景、機能と役割、住民がどのように関わってきたか、荒廃した原因、再生の必要性、今後住民がどのように関わっていくべきかなどを、まとめたパンフレットをつくり、直接住民と膝を交えて啓発に努めました。このような直接膝を交えた懇談会は二年間で百回にものぼりました。この懇談会でははじめ、もっぱら昔きれいだった頃の思い出話ばかりをやりました。その話の中で掘割の機能や水循環の大切さが、自然と押し付けがましくなくできます。楽しかった体験を持つ人の存在は大きいといえます。（私たちの市ヶ尾のイカダ遊びも、そんな意味ではとても大切な行事ですね。やはり、原体験は大切です）そして「昔のような環境を取り戻せるならば」ということになり、具体的な実務（川の中のヘドロやゴミの撤去はもちろん、川の上に設置した違法建造物の撤去など）も、自主的に行われました。また、町内会ごとに多少理解に差がありましたが、最初一本の川がきれいになり流れ出すと他の町内会も「うちの所も早く」となり、課題だったヘドロ捨て場も提供があったりして、当初の計画よりも短い期間で終える事ができました。

柳川から学ぶ



このように、柳川における川の再生は全国に大変大きな反響を呼び、全国各地に「希望」と「動き（市民活動）」を与えました。ただ、市民が行政を動かすような主体的な行動を起こすことにかけては、鶴見川の方がずっと先心的だと感じています。

私をはじめ柳川を訪れたのは、昭和40年ごろでした。まだ独身だった頃、親しい友人たちと

川くだりを楽しんだのです。そして、1988年、横浜で「柳川掘割物語」の自主上映にかかわり、川環境の市民活動に打ち込みました。そして今、再び柳川を、今度は子供を案内して訪れました。三十数年前に比べ、水質が改善され、周辺もきれいに整備されていますし川くだりに訪れる人も多いようです。

電話で広松さんにお話を伺いました。「こちらの市民活動はいかがですか？」と。残念ですがこの地方は「ものいわぬ美德」がいまだに存在しますと、おっしゃいます。しかし、矢部川（この川は私の産湯を使った川です）の流域で、子供たちの上下流交流会を行ったり、「豊かな有明海をこどもたちへ」と有明海の危機をみんなで考えようとシンポジウムを行ったりしています。また、筑後川では4、5年前から流域での市民活動が活発になり、流域連携クラブで流域マップを作ったり、「筑後川丸ごと博物館」もできているとか。鶴見川ほどではないけれど、元気な川人間はこちらにもおられるようです。

みなさんも会の生みの親・柳川に会いにいらっやしませんか？喜んでご案内します。

参考資料：「ミミズと河童のよみがえり」広松伝書